
君の物語

ササキヤス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の物語

【Nコード】

N2770BA

【作者名】

ササキヤス

【あらすじ】

夢の中にいたと思ったらいつの間にか異世界へ。それは君を知るための物語。よくある異世界召喚モノです。初作品で至らない点多々あると思いますがよろしく願います。

夢から夢へ（前書き）

初作品です。よろしくお願いします。

夢から夢へ

「ぎゃあああああああああああああああす！！！！！！」

お、お、お、落ちる！落ちる！落ちるって！！

俺は布団を蹴飛ばしながら飛び起きた。枕元の携帯を見る。その眩しさに眼を細める。不在着信3件、深夜3時26分。まだ真夜中だ。はあと大きな溜息を洩らし、汗でぐしゃぐしゃになった寝間着を取り替えるためベッドから降りた。どうにも変な寝相でもしていたのか身体中が軋んでいる。

「^{イヌミ}泉、クマひでーぞ」

昨日の朝そう言って人のほっぺたつつきまくってたのは誰だったか。最近めつきり老け込んだ長身の男を思い出して、目覚めてから二度目の溜息。

多分今日も言われるんだろうなあ、と俺は洗面所の鏡を見てまた深く溜息をついた。

・・・ああそうか。今日からあいつはいないんだっけか。そんなことを忘れているほど今の俺は疲れきっているようだ。

洗いたての寝間着は洗剤のいい香りがして少しだけ落ち着いた。

俺は思いつきりその香りを吸い込んで、眠れるかわからないけれどベッドに向かうことを決めたのだった。

汗でぐっしょり濡れたシーツは気持ち悪い。

湿り気の強いところから逃れるために寝返りを打つ。

ここ数日どうにも夢見が悪い。

真っ暗闇をただひたすら落ち続ける夢。それは暗いというよりひたすらに深い闇だ。

灯りがあれば回りが見えるとかそういうモノじゃない。ただそこに闇そのものがあるだけ。

その世界には前も後ろも右も左もない。

明晰夢みたいだ、と俺は勝手に思っている。

何せ随分意識がはっきりしている。夢のなかではっきりとこれは夢だと自覚できているのだ。

思考能力も割かしはっきりしているので、落ち続ける中でも緩やかに落ちていく時間帯は、結構気楽に朝飯何食おうとか、あの木偶の坊をどう懲らしめようとか考えたりしている。

寝返りを打つ。湿っていた場所はキンと冷え、少しだけ火照った肌に心地よい。

あの夢を思い浮かべるとどんどん目が冴えていく。

寝不足は人の心を弱くするって、好きなRPGのキャラが確か言っていたっけ。

どうせ見るならゲームの世界みたいな夢溢れる世界がいいなあ、なんて。

自分の馬鹿らしさにまた溜息をついた。

微睡み重くなつた瞼の先に、ただひとりの家族が見えた気がした。

いつの間にか俺は寝ていたらしい。
また俺は、落ちている。
一体どこまで俺は落ち続けるのか。
一体いつまで俺は落ち続けるのか。
- - - だんだんと夢の中で意識が目覚めてゆく。
そして、落ちる恐怖にいつもどおり取り乱し始める頃合いに、それは起こった。

眩い光が視界に広がる。俺は思わず眼を細めた。
暗闇の中には気がつけばぼくと月が1つ、2つ、3つ、と浮かぶ。
夢の世界は月が3つの世界。よくできたファンタジーだ。
案外馬鹿な考えも悪いもんじゃないな。
夢に常識なんて必要ない。しかも何か見えるならいつもより格段にいい夢だ。
こんな夢なら、起きているよりも素晴らしいかも知れない。
次第に世界がはつきりと姿を現す。
雲ひとつ無い夜空にはたくさん星。相変わらずの3つの月。
ああ、そうか俺は、仰向けに落ちているのか。
頬が冷たくなってきた。
風で寝間着が生き物のように呼吸を繰り返す。

「きれいな空だあ」

大きな声で言ってみる。

東京の空は星が見えない、なんて歌詞によくあるけれど、ここ空は綺麗だ。

つて星がいくらでも見えると田舎育ちの俺が考えることじゃないか。
にしても寒い。

現実の俺は、ふとんを蹴飛ばして寝ているのか。
寝ぼけてすっぽんぽんなのか。

俺は――

「な、ななななんだこいつは！！！！何処から落ちてきたんだ！！！！」

突然の声の方向を見やると、落ちる俺と並走するように落ちている少女がいた。

「おお、ついにこの夢に登場人物が……。感無量だ。」

俺は驚きのあまり完全に眼を醒ました。

俺は身体を突き抜ける風の冷たさに身震いをして、しっかりと眼を開ける。

その先には口を半開きにしてこっちを見ている先ほどの少女。

金髪、赤目。魔女っぽい三角帽子に黒の外套。いったいどのファンタジーだこいつは。

どうにも俺の隣から俺の上空に移動をしたらしい。

こいつは落ちているんじゃないか？自分の意思で飛んでいるんだ。

俺もこいつみたく制御できたらいいなあ。

「……むう。魔力にあてられているのか。どうにも変だのう。――対象 魔力 放出」

少女が俺に指を指す。

あ？

え？

今のは？

頭が少女の言葉により一気に鮮明になる。

俺は改めて少女を見て、念のために空を見て、肌を感じる風をしつかりと確認してまず深呼吸を試みた。しかし『だのう』ってなん

だ『だのう』って。ロリババアってやつかこいつ。よし、もう一度現状を確認しよう。いや確認するまでもない。俺がしなければならぬ行動はもう決まりきっている。

「た、たたたたたた助けてくだひゃい・・・」
「!？」

目の前の老婆系少女に土下座する勢いで頼み込む。恥も外聞もない。というかそんなこと頭の片隅にすらない。ちなみに空中で土下座する勢いで頼み込むとどうなるかの結果は

「ひっひぎゃあああ！おち、おち、おち、おちおちおち」
「・・・もう落ちていてはないか・・・」
「落ちるー!!」

曲がりなりにも先ほどまで安定していた落下が風圧で一気にアンバランスになるということだった。少女は聞こえよがしに大きな溜息をついた。

「はああああ・・・。未熟な魔術師かなんなのか知らんが情けないことだ。」
貴様も魔道の端くれにあるものならシャキッとせんかシャキッと！
「い、いいから早く助けて!!!死ぬ！死ぬって!!!」
「あああもう鬱陶しい。他人に飛翔術をかけるなどしたことないわ。まあ良い、ちよっと荒っぽいかなんとかなるだろ。・・・人は、地に足をつけるものなるべし」

その瞬間、俺の落下は先程の比ではなくなった。

薄れていく感覚の中、あの少女のようなババアのような子の悪役臭い三段笑いが聞こえていた。

ドタドタと狭いリビングに雪崩込む3人の男たち。

突然のことだったか滅茶苦茶びっくりしたんだよなあ。いやこのときは変なお客さんだなあなんて思ってたんだっけ。正直、ココらへんは結構曖昧なんだ、記憶。

「な、誰だ！」

大きな声を上げるこの人は確か俺のお父さん。メガネなんかかけて随分とお堅そうな人。全然似てないだろ俺と。まあ本当にこの人がお父さんかなんて確かめる方法ないから便宜上お父さんって呼んでるだけなんだけど。

俺をきつく抱きしめてる日本人形みたいな綺麗な若い女の人は、流れからいくとお母さんらしい。こっちも全然似ていない。

「薊アザミイイ、会いたかったぞお」

このダミ声の人はお父さんの知り合いらしい。このおじさん、吉田さんとは何回か会ったことあるよ。結構な額のお年玉をくれる人金持ちなのかな。今、お父さんに刺さってるナイフはトウノ曰く結構お値打ちらしい。

「あ、あ」

この間抜けな声は俺か。ああなんか小さい時の姿人に見られるの恥ずかしいなあ。

このときは正直何が何だかわからなくて結構ぼうつとしてたんだ。後この女の人の抱きしめる力が思いの外強くてさ、結構痛くて苦しかったの覚えてる。

・・・そうだ、この人はすっごく震えていた。

この人がさつきから何も喋らないのは多分怖かったからだと思う。

男たちの一人、ぶくぶくと太ったおじさん、豚の蚊取り線香に似ている人がニヤニヤ笑いながら女の人に近づいてく。

豚の蚊取り線香知らない？偉そうな割りに何も知らないなあお前。この人のことはトウノは教えてくれなかった。まあどう見ても悪人だよ。

「花珠^{カジュ}、ずいぶんと久しぶりだなあ」

ブツン。

か弱い糸が途切れるような、そんな間抜けな音がしてまた世界は真っ暗になる。

うわっ。ん、ああそうかここからの記憶が俺暫くないんだ。

この後何があったか、か？

んー、トウノから聞いた話だけど、この女の方は豚おっさんにレイプされて薬漬けにされて

どっかの国に売られるらしいよ。

一体どこの都市伝説だよって感じだよな。

ま、三流の悲劇ってヤツかな。トウノは花珠さんは運が悪かったと言ってた。俺もそう思うよ。

ああ、トウノって言うのはそこにいた木偶の坊のこと。

・・・そういえば、アイツ、このときどんな顔してたんだろ

そう思って俺は一人ぼけつと突っ立っている長身の、3人の中では一番若い男を思い出す。

ああ、そうか。この前とおんなじ。今にも泣きそうな顔で、俺を

「あいつはあんなときもぼけーっとしてたのか。」

俺はあののっぺりした薄い顔を思い出して、ムカツとしながら眼を醒ました。

まあ若いときはそこそこ男前とも言えなくはないか。

「あー、最悪の目覚めだ。」

「トウノとかいう男がお前の親代わりだったのか？」

「あいつが親？そんな訳あるか。出かけてはひと月ぶらぶら帰らないで偶に帰ってきてても家事も何もしない、本当の役立たず。・・・まあ、金とかは出してくれてるからそこそこ感謝はしているけど」

「・・・そうか。」

ん？俺今誰と話してるんだ。つーか家に勝手に入ってるこのガキンチヨはどっかで・・・。

「ああああー！！夢で俺を助けてくれたロリババア！！」

なんで夢の住人がリアルでまでいるんだ。それにしてもさっきの夢は酷かったなーなんて寝起き頭で考えてると空気が不意に変わった。ロリババアの方を見やると、青筋立ててこっちを睨んでいる。

「ほう、最強魔女エルルカ様を捕まえて今なんと言った貴様」

随分ご立腹なようだが見た目がハロウィンの仮装で本格的なコスプレをしている白人美少女なので全く怖くない。

おまけに先ほどから動く度に三角帽子のツバに乗った鈴がチリン、と可愛らしい音を立てているのが微笑ましい。

「どーでもいいけど部屋の中で帽子被ってたら禿げるぞ、ロリババ

ア。んでなんで人んちにいるんだよ」

ちよつと言いすぎだかな。俯いてプルプルと震える少女。ちよつとババアって言いすぎたかな。

10秒経ったか経ってないうちに勢い良く少女が顔を上げ、真っ赤な瞳で俺を睨みつける。おお、完璧に怒っていらっしやる。

「だ」

一歩、その少女は近づいてくる。小さいのにすごい迫力だ。きゅ、急に寒気が。

「れ」

その赤の瞳に射すくめられ俺は固まった。そういやこの部屋俺の部屋じゃないな、なんてちよつと冷静になってみたり。

「が」

ピッチャー振りかぶって第一球。ということとはさっきのアレは現実・・・？今俺は月が3つのバリバリファンタジー世界にいるのか？

「ババアじゃ！糞ガキが！！！！」

ドゴオつと音がして鳩尾に綺麗にめりこむロリババア（仮）の拳骨を見てまた俺は意識を手放すのであった。
今度は悪い夢を見ないよう祈りながら。

夢から夢へ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔

「連絡ご苦労。さつさと主の元へ帰れ。真夜中にレディの家に長居するでない」

明け方の空へ一羽のカラスが飛び立ってゆく。ようやく白んできた空は雲一つない。今日は快晴になることだろう。

石作りの重厚な部屋で彼女、エルルカ＝フィンは苛立ちをその小さな身体一杯で表現していた。

幾度も足を組み換え、舌打ちをならし、手元のキセルを思いつきり吸いては白煙を吐き、陶器のコップの中の酒を一息に啣る。ちなみにこの酒は赤の国特産の『辛い実』の酒。度数は80%を超える。目の前にはすやすやと暢気に眠る先ほど墜落していた少年。

最初は飛翔魔術の失敗かと思っていたがどうにも事情は複雑なようであった。

彼はどうやら異世界からの召喚者、しかも人間が暮らす世界から召喚された者らしい。

異世界からの召喚それ自体は、彼女の暮らす世界、通称銀大陸では大した珍しいことではない。

召喚術師という職業の存在が示すように、異世界の存在は公に認められているからだ。

人格をしっかりと持ち、人型をした魔物を異世界から呼び出すことができる以上、人間が普通に暮らす世界があつてそこから呼び出される人間がいてもおかしくはない。

しかし、彼女エルルカの目の前の少年が抱えている問題は簡単なことではなかった。

普通の召喚であれば召喚者と召喚された者の間に契約が取り交わさ

れるが、少年には召喚者が存在しない。

通常召喚された者は、召喚者の魔力の供給が僅かでも必要である。肉体保持の魔力自体は界血カイケツを変換すれば良いのだが、世界に存在している表明をする魔力は召喚者から供給されたものでなくてはならない。

ところがこの少年には何処からも魔力の供給はなく、契約魔方陣も見当たらない。

それだけならば勘違いでただの一般人だと言えたのだが、原因不明の空間の歪みが補足されていることを先ほどの報せでエルル力は知った。そして通告なしの召喚術行使を行った召喚師を捕えるために教会騎士団が動いていることも。

召喚者がいれば召喚者にとりあえずの罰金、または研究成果の没収。酷い場合は保護観察もこれに加わる。

しかし召喚者が不在の召喚、基本的にそうだった場合は召喚獣が主を殺したことがほとんどであるため、そういったイレギュラーはエルル力の住む白の国では処分対象、すなわち死刑、それが珍しい素体であれば生涯実験道具となることは確定事項だ。

「胸糞悪い話だとは思わないか、フィーレ」

そう呼ばれた真っ赤な髪の青年は頷く。

「しかし、随分と記憶の構成が滅茶苦茶だな。父母の死亡前後の記憶が全くないのは精神的ダメージを慮れば仕方がないでしょう。しかし映像で見る限り、この頃は5、6歳、それ以前の記憶が全くないことはありえん。記憶を何らかのショックで失ったか、蓋をしているか。ふむ、もう少し調べて見るか・・・」

そう言って持っていたキセルを少年に翳そうとするエルル力をフィーレはじっと見つめる。

単純な腕力ではエルルカより数十倍上の炎霊のその視線は非常に冷たい。

「じよ、冗談だよ、冗談。しかし一応この国にも法というものはある。異世界からの召喚者は契約が無い限り殺さねばならんぞ。お前もわかっていようファイレ」

「存じております。しかし主よ、彼の処分については、どうにかお情けを与えることはまかりなりませんか」

「私も一応大天才とは言え一国民だぞ。法を破ることを勧めるとは秩序の炎の体現者たるお前らしくもない」

「改めて、どうにかお情けを与えることは罷りませんか、と申し上げます」

「・・・つち。ああもう炎の精霊様はお優しいことだな！」

使い魔を睨みつけていた陰険な眼を抑え、柔らかく眼を細めながらエルルカは眠り続けている少年に眼を向ける。歳の頃は14、5。身長は160スイル（1スイル＝1センチメートル）を越えたばかりか。

自分の歳の十分の一かと思うと余計にさつきババアと言われたことが腹立ってきて、彼女には珍しい優しい顔が歪み始める。

「・・・主が保護する気がないのなら私が保護を」

エルルカの怒りの雰囲気を感じたのか、鈍色の瞳が、彼の仕えている主人を睨むように見つめる。

「ええい、お前は本当に冗談が通じないな！こいつは！この私！稀代の魔女にして白き炎の魔術師、エルルカ！フィンが保護するっ！文句を行ってくるならば国の連中も黙らせる！これは誓約だっ、二言はない！これでいいかっ！この筋肉ダルマめ！！」

「さすが主、賢明なご判断です。」

安心したのか、ファイレはほっと胸を撫で下ろす。

フィーレとて本気で主を疑っていたわけではない。召喚に応じたときからその魔女の本質をフィーレは知っていた。超がつくほどのお人好し。

人に騙されても、それを自分の未熟だと恥じ、復讐よりも自己の研鑽を選ぶ。

戦乱のあるを風聞しては、金稼ぎと称して、薬をタダ同然で配りに行く。

彼が仕えている主はそんな人物だ。

しかし、そんな魔女失格の魔女も一応は人間。

彼女の暮らす白の国の法、しかも第一法、すなわち刑執行の優先順位が高い法を見逃すのは難しいかも知れないと彼は考えていた。

無論、それは杞憂に終わったが。

「しかしどのようにして黙らせるのです？如何に主とて、第一法を破っては……」

「まあ間違いなく糞ガキ没収の上国外追放、酷くて死刑であろうな。」

「……何かお考えがあるのでしょうか？」

「フン。……まあな。そろそろこんな国飽きてきたであろう？フィーレよ。」

「ま、まさか、お、お一人で戦争でもなさるおつもりですかっ！」

フィーレは自分の仕える主が、喧嘩っ早いことを思い出してその褐色の肌を青ざめさせた。

「んな訳あるかっ！この筋肉ファイヤー！引っ越すんだよ！！私を何だと考えているんだっ！」

「……常に自身の力のなさを憂いている、心優しき魔術師にして偉大なる魔女、ウィズリルの意思を継ぐ当世ただ一人の正統継承の魔女です。」

「……全く調子のいいことだ。まあいいっ！そうとなればさっさとずらかるぞ！お前は荷造りしろ！私は、そうさな、とりあえずは

あのメスガキに話をつけてくる！」

「彼はどうするのです？」

「起きても暴れないようにベッドに縛り付けとけ！運ぶときは魔法の靴につっこんどく！」

「少々手荒ですが、それが一番安全ですな。承服しました。」

ドタドタと足早に部屋を後にした主を見送り、フィーレはどこからともかく皮製の紐を手にし、規則正しく寝息を立てている少年を見つめた。

「おい！」

エルルカの声が回路を通してフィーレの頭に響き渡る。

「先ほど言うのを忘れたが、私を説明するときは大天才というのをきちんとつけとけ！このヤンキーへアー！」

「・・・了解致しました。マスター」

顔を赤く染めながら、プンプンと本当に聞こえるように怒っているであろう自らの主人を思い浮かべ、炎の精霊はその厳しい顔を柔らかに微笑ませた。

魔女と使い魔（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

魔女と使い魔？

「あ、あのここは何処でしょうか。」
返事はない。

「ど、どうして俺を縛っているんでしょうか。」
返事はない。

「あ、あの一」

「む、動かないで頂きたい。縛ることが困難になる」

「し、失礼しました・・・」

ロリババアに殴られ気絶して眼が覚めたら髪が真っ赤で、上半身裸のマッチョに俺は縛られている最中だった。

ああ、夢なら覚めたい。

確かに俺は偶にそっちの気があるんじゃないかと人に言われることはある。

女の子と話すのは苦手だし、いつつも得体の知れないおっさんの面倒見てるせいだ。

しかし一応健全な思春期男子。何が悲しくてこんな筋肉に縛られなきゃいけないんだ。

別に男でも見惚れるくらい均整の取れた美しい肢体に嫉妬している訳ではない。

なんだ肢体って、官能めいた表現だ、本当に誤解受けちゃう。

ともかく俺はそっちの人じゃないし、こんな筋肉別に羨ましくなんかない！

ああもうあれもこれもそれも全部トウノのせいだ。

あいつがあの時家にいたら多分助けてくれたはずなのに。

俺は偶には便りになる、あの男を思い出す。

いや、こういう考えが俺がホモ扱いされる所以なのか。

くう、ともかくこの現状を打破せねば。

「あのここは何処でしょうか」

勇気を振り絞って先ほどの質問をもう一度言う。

筋肉野郎は意思の強そうな眼でぎつと俺を見ている。う、怖い。

「・・・ここは、白き炎の魔術師、現存するただ一人の魔女、大天才エルルカ・フィン様の城だ」

魔術師？魔女？つか大天才ってなんだよ、なんでもでかけりゃいってもんじゃないぞ。

というかここはやっぱり異世界ってやつなんだろうか。

「あの魔術師って、いつたい・・・？」

「ふむ、泉殿は異世界から召喚されたのだ。知識が無くて当然だろう。しかし私も主から説明を許されている立場では無いのだ。申し訳ないが主が帰ってくるまで暫し待っていてくれ」

「はぁ・・・」

こりゃ駄目だ。悪い奴じゃきつとないんだろうけど頭堅そうだし。

筋肉が多いからだなきつと。

魔術師？魔女？なんで上半身裸？気になることはたくさんあるけれど、これ以上は今が多分無理だ。

きつとこれが覆面の人たちとかに拉致されてたらもつと混乱していたのだろうが、ここまで現実感ないと返って落ち着くことができる。

俺は辺りを見回してみる。

石造りの部屋は6畳の俺の部屋が3つ4つ入りそうな広さ。といっても俺が見える範囲部分だけなので正確なものとはわからない。

俺が寝ているベッドはかなりでかく、天蓋付き。俗に言うお姫様ベ

ツドってヤツだなこれは。

隣には小さな丸いテーブルと立派な椅子。テーブルの上には凝った装飾の陶製コップと酒らしき瓶。この酒をあの手で飲んでたら様になるだろうな。むむ、何か腹立つぞ。

ざっと見渡すかぎりこんなもんか。この部屋ベッド以外ほとんどないみたいだ。

時刻は窓から差し込む灯りから見て夜ではなさそうだ。

「泉殿」

「はい？つてなんで俺の名前」

「今は混乱しているかも知れないが決して悪いようにはしない。どうか主を信じて待っていて欲しい」

俺は何も言えなかった。

さっきまで怖いと思ってた瞳が思いの外優しくそうで、もしかしたらもう二度と会えないただ一人の家族を思い出していたのかも知れない。

俺が必死で何か言おうと考えていると、木製のドアが勢い良く開かれた。

「帰ったぞフィーレ、そして今すぐ支度せよ、紫の国の城に行く！」

部屋に駆け込んできたのは先程の金髪ロリババア。いやババアって言ったらぶん殴られたんだっけ。うん、次から気をつけよう。

「お早いお帰りで。一体どちらに行っていたのです？」

「教会の將軍様のところだよ。あのガキ、少し脅したらすぐ膝を折りおった。全く情けない！・・・しかし幸運だった。時間稼ぎが効いてる内にずかるぞ」

「リラ様のことです。こちらの事情もお見通しだったのでしょ。

準備はもうできております」

「ふん、どうだか。あいつはいつまで経っても不肖の弟子だからな
っ」

2人の会話に入っていけずにいると、少女が俺を見て舌打ちをする。

「む、起きているのか。フィーレ、さつさとこいつも鞆に詰め込ま
んか。まさか連れて歩いてく訳もいくまい」

「主よ、その件に関してですが、彼を連れて歩いて行きましょう。
その方が彼の為になるはずです」

「何を悠長なことを言っている！紫の国までなんのアシも使わんか
ったら三ヶ月はかかるぞ！教会の連中の足止めもせいぜい1週間が
いいとこだ」

さっきの話からするとこいつがエル、エルなんだっけ。とにかく大
天才様か。

「しかし、泉殿はこれからこの世界で暮らさなければならぬので
す。召喚者を探すにせよ、何にせよある程度独立独歩できる力は必
須です。これは良い機会ではないですか」

そしてこの筋肉はフィーレと言うようだ。それにしてもやっぱり帰
られないのかな。

「何を言っているんだ馬鹿者！そんなの紫の国に行ってから考えれ
ば良い話だ。今はそんなことやってる場合じゃない！」

そういえばムラサキの国って何だ。ムラサキって色の紫のことか？
すごい国名もあったもんだ。

「主のことです。どうせ落ち着いたところで何かと面倒を焼きすぎ
て彼の自主性を奪うことになるだけでしょう」

「な、ナナナ何を！私は大天才だぞ！そんな温いことあるか！」

「彼は随分線が細い。あなたの好みではありませんか」

な、なんだと、線が細いだと！このそりゃあ俺はお前みたく筋肉な
いけどさ。

言っただけのことと悪いことがある。

「ええい、いい加減にしろ！立場を弁えよ！」

全くだ！

大天才様はキーンツとばかりに腕を振り回している。

「これは失礼致しました。しかし、既に三人分の旅支度はできてお
りますし」

「この馬鹿炎！ん、いや待て。・・・今までになく強引じゃないか
？理由を言え」

「・・・彼は召喚術師としての素晴らしい適性を持っています」

ショウカンジュツシ？召喚ってアレかサモナーってヤツかな？異世
界にきて能力ゲットって有りがちな話だ。

「ふむ、いやなるほど。お前ほど気位の高い精霊が言っただ間違い
無いだろう、だがそれだけではあるまい」

「はい。鞆の中には魔術具も多く含まれます。ですから鞆に閉じ込
めるのは危険な可能性があります。」

「どういうことだ。さっぱり意味がわからんぞ」

「自分で言うのもなんですが、この私でも惹かれるほどの魔力色な
のです。封印されている魔物その他が出てくる危険もあります。・・・

・幸いこの部屋は結界があるので平気ですが非常に危険です。」

「それは本当か。こいつ大して魔力もないように感じるが」

「間違いありません。魔力量はともかく魔力色は異常です」

「ふん、イレギュラーはやはりイレギュラーというわけか。よろしい、こいつも連れてく。支度は任せたぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「後それと私に舐めたこと言った罰は存分に受けて貰うぞ、フィーレ！」

「はい、覚悟しております」

どうやら話が終わったみたいで、フィーレとか言う男が俺を縛り付けている紐を一本一本外していく。

「あ、あの」

いろいろ聞きたいことはあるが、上手く言葉にできない。何か一番大切なことを。

「やっぱり帰られないんですか？」

「ふん、自分の現状を把握できる程度の知能はあるか。その答えは『そんなもんは知らんしわからん』だ。とりあえず帰られる可能性を少しでも高めたいのならこの私に感謝し尽くすことだ！」

「はぁ・・・」

「詳しい事情は後で話す。どうせ時間はあるんだ。お前は因果律からも外れてるだろうからな。ゆっくりじっくり教えてやろう。この大天才エルルカ様かな。まあ取り敢えずは簡単に説明してやろう。オマエ異世界からきた、ワタシ大天才、この筋肉ワタシの奴隷。オ

マエ殺される。ワタシオマエ助けてやる。」

なんで片言なんだ。うーん、どうにもこの子と話していると気が抜けてしまうというかなんというか。テレビや雑誌でも見ないような美少女だけれどその偉そうな喋り方はギャップが激しすぎてどうにも奇妙だ。にしても何が何だかさっぱり解らない。だけど絶対に帰られないという訳でもないという事実は少なからず俺を安心させた。

「外し終わりました。泉殿、こちらに服を用意してあります。着替えてください」

いつの間にか男の手には木綿っぽい薄茶の素材の服っぽい何かがあった。

俺は起き上がりそれを手にとる。なんだこりゃ。広げてみるとそれは長方形の袋みたくなっていて、頭と腕の位置らしきところに穴が空いている。これがもしかして貫頭衣ってやつかな。

「着方がわからないのであれば手伝いますが」

「いえっ！いらなです！全然大丈夫ですっ！自分で着られます！」
「そうですか」

少しフイーレさんが残念そうな顔をしたのは置いておこう。

とりあえず、寝間着脱ごう、と指を上着のボタンに掛けたとき、ベつとりと纏わり付くような視線を感じた。

「はあっ、はあっ・・・」

見てる。滅茶苦茶見てる。エルル力がじいっと俺の一挙一動全てを見逃すまいとこちらを見ている。

「ど、どうした、早く着替えんか。」

「・・・」

うう脱ぎにくい。しかもエルルカだけでなくフィーレさんの視線も感じる。

「主よ、着替えにくいようです。暫く部屋を出ていきましょう」

意を決して脱ごうとすると意外にもフィーレさんの助け舟があった。渋々といった様子でエルルカは部屋を出ていく。変態ロリババアとかもうアイツはダメダメだな。

「ふー」

ようやくと着替え始めることができた。しかし適当な服だなあ。俺でも作れるんじゃないかコレ。

とりあえず下着姿になり、被るようにして貫頭衣を着る。着る前は大きく見えたが案外、サイズは丁度よかった。

それと最初はゴワゴワしてるのかなあと思っていたけど、結構肌に心地よい硬さで気持ちいい。

少し肌寒いけどまあ、動いたりしたら暖かくなるだろう。

「あの一、着たんですが」

俺が呼びかけるとギイと音を立ててドアが開いた。

「それではこの紐で腹の辺りを結んでください。背中に紐を通す穴があります。」

先ほどまで俺を縛っていた紐よりは太く黒い革素材の紐を言つとおりに背中の穴に通し腹の辺りで縛る。
ベルトのようなものだろう。

「この紐は魔術的措置がなされており、魔力色をある程度意図せずにも隠せるようになります。努々外さないように」

「はあ」

魔術だか魔力だか滅茶苦茶ファンタジーな世界だということは認識できた。取り敢えずは放つて置くしかない。

「おい待て、フィーレ。そんな高度な魔術道具、私は知らんぞ。と
いうかそいつがあるなら別に鞆でもいいじゃないか。」

「まあ良いではありませんか。さてもう時間もありません、さっさと出ましよう」

「待て待て！納得行かん！お前その魔術道具一体本当にどうしたんだ！まさか・・・」

「買いました。城の金塊が減つたのに気がつかなかつたのですか？
泉殿、これを羽織ってください。その衣服は一応結界魔術がかけられておりますので見た目以上に安全なんですよ」

そう言つてフィーレさんは俺に藍色のフード付きのマントを手渡した。少し寒かつたから有難い。どうやって着るのかよくわからないので、フィーレさんに着せてもらう。近くに立つとやっぱりデカイ。悔しい。

「勝手に話を進めるな！フィーレ、私が、この私が百年以上かけて溜め込んだお宝を使ったというのか！一体いつの間に使ったんだこの戯け！」

「申し訳ありませんがいつだったか正確に記憶しておりません。．．．これでよし。靴はこれを。これは炎の精霊が作った靴です。僅かですが体力の底上げをしてくれますし、何より頑丈です。お履きください」

差し出された靴は茶色いブーツ。精霊が作ったってどういうことだ。サイズは大きいように見えたが履くと丁度良い。

「精霊の作った衣服は、装着したもののサイズに合う魔術がかけられているのですよ」

フィーレさんは不思議な顔をしている俺に微笑む。なるほど、それは便利だ。しかもすごく軽い。ブーツだけど走るのも楽そうだ。

「精霊の作ったブーツだと！お前使い魔だから霊具は作れないと言っただけじゃないか！」

「ですから友人から以前譲ってもらったのです」

「ああもうお前、本当にいい加減に．．．」

「それでは行きましょう。主、泉殿。」

そう言っただけでフィーレさんは足元の靴を手取る。たぶんアレがさっきから話題に上っている靴だろう。

俺はその広い背中を追う。というやっぱり外でもこの人上半身裸なのか。寒くないのかな。露出狂？

「お前勢いで誤魔化そうとしてるだろ！というか良く考えたら鞆に入れようがどうしようが、魔物を惹きつける魔力色なら関係ないではないか！おのれ、主を騙すとは何事か！」

後ろから怒鳴りながらドタドタと追いかけてくるエルルカが何だかおかしくて俺は何となくほっとした気持ちになっていた。

そっいえばトウノ以外の人と話すのは久しぶりだったな。

そんなことを考えて、これから自分がどうなるかなんて、不安なことを考えることをこの時俺は避けていたのかも知れない。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

団長殿の憂鬱（前書き）

僅かでもユニークがあると本当に嬉しいですね。読みづらい点あると思いますがこれからもよろしくお願いします。しよっちゅう改稿すると思いますので、ご迷惑をおかけします。

団長殿の憂鬱

カリ、カリ。

豪華な騎士長専用の執務室は意外と寒い。

私は身震いしながら、酒入りの紅茶を含む。

今書いている書類は先程の未通達の界魔術行使の報告書だ。

あれもそれも、先程エルルカ様が窓から執務室に飛び込んでくるや否や

「さっきのアレ、無かったことにしろ。師の命令に背いたらどうなるかわかっていような？」

なんて仰ってきたからだ。

エルルカ様は本当に無茶苦茶なお方だ。

あれだけの規模の界魔術行使を見逃すなんて都合の良い話早々あつてはたまらない。

私にも立場と言うものがあり、法の体現者たる教会騎士としての誇りもある。

だがエルルカ様の子弟として私の最初の誓約は『師の命に決して背かぬこと』

・・・八方塞がりとはこのことを言うのだろうか。

そんな訳でこんな夜明けまで書類を何とか弄り回している。落とし所とすれば一週間程度搜索を遅らせることだろうか。

コン、コン。

ドアが叩かれる。私はペンをインク壺に突っ込んだ。

「誰だ？」

「副騎士団長ヒューム、ただいま参りました」

「む、入れ」

入ってきた壮年の男は私の右腕たる副騎士団長ヒューム。

元は奴隷身分だったというのに叩き上げでこの地位まで来た優秀な人物だ。

生まれのせいかわ魔術は不得手ではあるがその槍術たるや白の国一と言って過言ではない。

これは鼻屑目でもなんでもない。恐らく魔術なしの勝負だったら私でさえ負けるだろう。

しかも冴えているのは武の方面だけではない。各国を回ったという知識は幅広く、政治学から簡単な医学まで修めている。ああ、ヒュームはかっこいいなあ……。

そう、何を隠そう彼は私の初恋の人にして純潔を捧げるべき人物だ。

彼との出会いは私の叙任式の後。

前任の団長は年齢を理由に辞任。規定により副団長も退任していた。副団長の人事と言うのは外部から功績のある者が団長の任官後に議会から推薦される。

これは騎士団の権力もとい教会の権力を上げすぎないための措置だ。歴代の団長のほとんどが副団長との軋轢に悩まされていると聞いていた私は憂鬱を隠せないでいた。

そんな私が物思いに耽っていると、ドアがノックされ、そう先ほどのように長身の壮年の男が入ってきた。

固そうな黒髪は全て掻き上げられ油で固められている。鋭く光る青い瞳は武人のモノだ。

こいつ、強いな。戦士の嗅覚で観察をする。

真新しい甲冑を着ている彼が副団長であるとき私は確信していた。

「失礼致します。この度副団長に任命されたヒュームと申します。

元奴隷階級のため姓が無いことをお許しください。リラ＝メイスト団長でお間違いないですね。・・・ああ、噂に違わずお美しく聡明そうなお方だ。あなたの下に仕えることができ光栄です。」

「・・・安い世辞は良い、ヒューム副団長。挨拶ご苦労。我々は法に仕える騎士だ。私に仕える必要など無いぞ。議会派、教会派関係なくこれからは同僚だ。例えその思惑がどうであれ、仲良くしたいものだな。」

「はい。私もそう思います。・・・ところで団長殿、詩は読まれま
すかな」

「随分と不躰だな。私も騎士だ。ある程度は嗜んでおる」

「これは失礼しました。しかしそうですか。私もよく詩を読みます」

「ふん、嗜む程度だと言っているだろう。しかしその年で詩とは随分と雅やかなことだな」

「お恥ずかしいことです。しかし詩を好きでいて良かった。あなたと血生臭い話だけでは寂しいですからね」

そう言って朗らかに笑う男の邪気のなさに私は気がつけば恋をしていたらしい。

今まで、騎士として武術魔術の修練の傍ら、いつか誰かのお嫁さんになりたいと思い、料理やら裁縫やら詩歌を学んできた。それをこの男に捧げたら、枕を共にし、愛の詩歌と一緒に語れたら、なんて・・・。

と、いかんいかん。今は腑抜けている場合ではない。

「どうしたんだこんな夜更けに。すまんが案件が溜まっていてな。要件を言え」

「はい。団長、先程の界魔術ですが・・・」

ま、マズイ。というか魔術ベタなヒュームですら気がつく魔術行使をどうやって隠し通せばいいのだ。

「ん？んん？そ、そんなの無かったぞ！な、何を言ってるんだ、寝ぼけているのか、アハハ・・・」

「・・・『界魔術行使の報告』とその書類に書いてあるようですが」

「・・・うっ！」

うわあああ！このままじゃヒュームに嫌われる。というか上にバレる！ヒュームに嫌われてエルルカ様に呆れられる。おまけに団長をクビ？最悪だ！・・・なんとか言い訳を、ああエルルカ様、恨みます。

「ふふ、団長、こんなことではお偉方は騙せませんぞ。失礼ですが書類をお貸しください。何とか致しましょう」

「へ？」

どうしてヒュームがそのことを知っているの？と私が混乱していると、失礼とばかりにヒュームは私の机にある書類を来客用のテーブルに攫っていく。

「先ほど白炎の魔術師殿が参られて事情をお話くださったのです。法の守護者たる教会騎士として許されないことですが、罪の無い少年を殺すことは私にはどうしてもできません。私は一人の騎士であ

りますから。・・・魔術師殿と団長の悪巧み、協力させて頂きます」

「あ、ああ。って少年！？何だそれは、私はそんなこと聞いていないぞー！」

師匠はただ『なかつたことにしろ』としか言っていないかった。

私に言わないでヒュームに言つとはどういうことだ。というかなんでヒュームに話したんだ。

「おや、そうでしたか。・・・ああ、実は私とエルル力殿はここに勤める前から親交がありまして。団長が任命される際に後見を頼まれているですよ。本当は黙っていると言われていましたがこの際いいでしょう。」

「そ、そんな。お前、じゃあ私の任官のとき・・・」

「ハハハ、団長が詩を愛していらつしやつたのは聞いておりましたからな。警戒を説くために一芝居打つたわけです。無論私が詩を好んでいるのは事実ですよ。ここだけの話ですが議会もお方お手回したそうです。団長は本当に師に愛されていますね」

ニコツつと微笑むヒューム、やっぱりかっこいい。いや今はそれより、ヒュームと師匠が前から知り合いだと？

以前から師匠には私の恋愛相談に乗って貰っていた。何せ師匠は今年で263歳。人生経験は豊富だろうし恋愛についてもいろいろと知っているだろうと思つてのことだ。しかし、知り合いつてことだ、あの人の性格なら絶対・・・。

「先に言っておきますが、私は団長のお気持ちに今はお応えできません」

バラしてやがった、あの糞ババア！100歳鯖読んでる癖に若者の未来を邪魔しようと言っのか！

「しかし」

「？」

「それは団長が私には美しすぎるからです。・・・ですからもう少し待っていてください。団長に吊り合うような男になれば、私から求愛致しましょう」

か、か、かつこいい！ヒュームはやっぱり世界一だ！

「さて、早速ですが書類の改竄から始めましょう」

「う、うん。あたし、どうしていいかわからなくて」

「・・・団長、そういった口調は風紀の乱れに繋がります。謹んでください。」

「うきゅう・・・」

白の国教会騎士団団長 リラ＝メイスト 31歳、彼氏いない歴31年。花嫁修業が少しだけ報われた一日だった。

団長殿の憂鬱（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔？（前書き）

説明回な感じですが。

魔女と使い魔？

「お！あれは魔女様の馬車じゃないか」

「魔女さま、この前はお薬ありがとうございました」

「まじよさまー、あそぼー」

小さな村のど真ん中を走る街道はお祭りのような騒ぎになっている。

「ええい！煩いぞ、愚民ども！ジヨナサン、処方した薬は酒で飲むなどいうことを忘れてはおるまいな！エリカ、腹の子供のために栄養をきちんと取れ！金が足りぬなら旦那を殴っても働かせよ！ヨシユア、お前今年40だろ、さつさと結婚しろ！母親も安心して死ねんぞ！ええと、それから・・・」

幌馬車から顔だけ出して、怒鳴り続けている少女もとい老婆。シユールな光景だ。

「す、すごいですね」

「主は慕われておりますから」

御者台のフィーレさんが傲慢気に微笑む。

俺たちはあの城を出てから広い道を馬車でずっと突っ走っている。

歩いて行くと聞いていたから少し拍子抜けしたけれど、文句を言える立場では無いのでとりあえず黙っている。

そうそう、あの城と言ったが、本当にあそこは城だった。ヨーロッパの山奥に佇む古城って感じかな。廊下は真っ赤な絨毯がひかれて、なんだかよく解らないけど高そうな花瓶とか絵画が飾ってあったし、入り口のホールには騎士の鎧がババァと並んでいた。

こんな状況でもなければ記念撮影でもしてトウノに傲慢してやりた

いくらい凄かった。

「でも、こんなに目立って大丈夫なんですか？俺、追われてるんですよね」

「心配には及びません。リラ殿が足止めをしていますから」

「はあ・・・」

足止めしてくれている人もまさかこんな目立つ逃走劇を繰り広げるとは思っていないだろうな。

「おい、そろそろ飛ばしていいぞフィーレ。大体終わった」

叫び続けて疲れたのかぐったりしながらエルルカが座り込む。近くで見ると彼女は本当に美少女だ。

その金の髪は絹糸みたく艶々していて白い肌は興奮のせいか紅潮している。

余り広くない幌馬車の中じゃどうしても近寄らなくてはならなくて、俺は彼女の甘いハチミツみたいな匂いにクラクラしながら彼女に近づいていく。

エルルカの綺麗な顔な悪戯な子猫めいた微笑を浮かべ・・・

「チツ、そのフード、なかなかの魔術防御だな。誘惑魔術の効きが随分悪いぞ、フィーレ」

・・・はい？というかこの馬車結構広い。6人は優に入れるだろう。俺は慌ててエルルカから離れる。

「どうした坊や、目の前にこんな美少女がいるんだ、さあカモーン」
は、腹立つ。エルルカの眼がタクワン型になってニヨニヨこちらを見ている。
子供の癖に生意気な。俺は思わず彼女の頭を拳骨で軽く殴った。

「い、いてっ！おい！貴様立場を弁えぬか！この大天才エルルカ様に手を出した罪は・・・」

「いい加減にしてください、主よ。そろそろ村も抜けました。泉殿、我々はあなたのことをほとんど知らない。順序があべこべになつて申し訳ないが、自己紹介をお願いしたい。」

「オイ！勝手に進めるな馬鹿者！いいかイズミ！自己紹介するんだ自己紹介！」

なんだか滅茶苦茶だがそういえば俺も実際何が何やらまださっぱり解らない。城から出るときはフィーレさんとエルルカがずっと言い争っていて（エルルカが一人で騒いでいただけけど）なかなか話しかけられなかった。とりあえず自己紹介しよう。

「俺の名前はなぜかもう知ってるみたいだけど、俺の名前は泉。年齢は16歳。男。日本って国出身。えつと寝てたら空から落ちてる途中だった・・・？」

「なんだその訳の解らん自己紹介は」

「ごめん、俺もよくわかっていないんだ。夢だと思ったら夢じゃなく、えーと」

「失礼、泉殿、貴殿に姓はないのですか？我々の世界では姓の無いことは奴隷階級を意味するのですが」

「ど、奴隷？まあある意味奴隷っちゃ奴隷だけど」

俺が奴隷なら家事奴隷ってヤツだなたぶん。にしてもこの世界、奴

隷っているんだ。

「お気を悪くしたなら申し訳ない」

「いやー、全然大丈夫です。俺の世界には多分知っている限り奴隷階級はいないですよ。えっと俺の姓でしたね。確か今は川田だったけな」

「奴隷がないか、そいつはいい。んで、お前の姓カワダだったか？変な響きだ。それに『今は』とはどういう意味だ？」

「ああ、扶養者がしょっちゅう苗字変わる人だったからなあ。」
「??????」

胡散臭げな眼でエルルカが俺を見てくる。・・・しようがないじゃないか事実なんだから。

俺の面倒見ていたトウノは何の仕事しているか分からないが苗字がよく変わる男だった。

といっても苗字が変わったところで俺には何の関係もない話だったから特に困ったことは無いけれど。

結婚詐欺で金を稼いでいたというのが俺の予想。つくづく最低な男だ。

「まあ良い。次は我々が自己紹介しよう。私は白き炎の魔術師にして正統血統の魔女、大天才エルルカ「フィン。んでこいつは筋肉ダルマだ」

「・・・私はエルルカ様の使い魔、火の精霊、フィーレと申します。筋肉ダルマ、いや確かに筋肉ダルマだ。くそ、羨ましい。」

「ゴホン、それでは泉殿には現状の説明をしなければなりませんね。・・・一度で全てを教えることは不可能ですからまずは簡単なこと

から説明しましょう。」

そう言つてフィーレさんは手綱を離した。つてあれ手綱離していいのか!?

「ああ、大丈夫ですよ。彼らは利口ですから意図を理解してくれています。主よ、私が説明して良いのですね?」

「あー、メンドイからパツパとやってくれ。どうせ説明したところで自分で実感しないと覚えられないだらうけどな」

本当に面倒臭そうに手をヒラヒラとふるババア系少女。

フィーレが手綱を置いて馬車を引つ張る馬のような生き物はブレずに走っている。

「それでは説明させて頂きます。まずこの世界の話をしなければなりませんね。この世界は通称銀世界、もしくは銀大陸ともいいます。人間は第一世界とも呼びますね。人、精霊、魔物が共存する世界です。五大国、我々が今いる白の国、黒の国、赤の国、青の国、黄の国、それと無数の小国によって成り立っています。ちなみ我々が今向かっているのは紫の国というところです。」

ふむふむ。銀世界って雪でいっぱいなのやつみたいだな。しかしやっぱりというべきか精霊とか魔物とかいるのか。・ちよつとワクワクする。

それと国名が色というのはこちらでは普通のことなのか。まあ覚えやすくいつか。

「続けます。今第一世界と申し上げましたが、無論第二世界、第三世界もあります。第二世界は通称金世界、神、精霊、魔物の世界で

召喚された者は基本的にここ出身です。私の故郷もここになります。そして第三世界、これは銀、金世界以外の雑多な世界で、泉殿の故郷もこここの何処かでしょうな」

「雑多な世界の1つか、俺のふるさと・・・」

雑多な世界扱いはちょっと哀しい。まあ確かに碌でも無いところではあったけれど。

神様のいる世界が第二世界って人間の傲慢ここに極まりりって感じか。

「ところで泉殿は魔術を使えますか」

「魔術？とんでもない。俺は一般人ですよ。魔法とか魔術とか、俺のいたところじゃ物語のなかでしか存在しないものです」

「ふむ、なるほど。泉殿の世界では魔法は架空の存在と。もしかしたら第三世界外からの召喚もあり得ますね」

フィーレさんは少しだけ考えるような素振りをして一息つく。

「魔法とは、霊血、すなわち行使者の魔力を供物に、界血、すなわち大地に満ちている魔力に働きかけ事象を操る神秘術の総称である。』。これがこの世界での魔法の定義となっていますが、この説明で理解できますか？」

「うーん、MP消費してファイヤーするってことかな。なんとなく大丈夫です。」

「それはよかった。魔法の中で人が主に使うものを魔術、精霊が使うものを精霊法などといって区別しますがそれは今はいいでしょう。」

ふんふん。専門用語っぽいのはさっぱりだけど、魔法はいろんなす

ごいのの総称ってことね。よし！オーケー。

「さて、ここまでで何か質問は？」

そう言ってフィーレ先生は一旦話を止める。

エルルカは、椅子にもたれ足をブラブラさせている。だらしないなあもう。

それにしても質問か。何かあるかな。

「んと、まず俺はその魔法によってこちらに来てしまったんですか」「恐らくそうだ、としか今は言えません。あなたが召喚者を殺していない以上、召喚者がいないなどと言ったことはあり得ないのですが。・・・そうだ泉殿、召喚者に心当たりはありませんか」

そんなこと言われてもなあ。俺はクビを振って解らないということ伝える。

少なくとも俺の知り合いに魔法使いはいなかったし。

「召喚魔術というものは別名界魔術といって霊血を媒介に界血を供物として捧げ、異世界から生物を呼び寄せ使役する特殊魔術です。その成り立ちから正確には魔法とは異なるものなんですが、一応魔法の一種として数えられています。他にも特殊な魔法はいくつかありますがおいおいそこは教えていくこととしましょう。」

あ、頭が破裂する。レイケツやらセイケツやらなんなんだ。魔法なんだか魔法じゃないだかはつきりしろ。

ん、そういや、俺が召喚術師として才能があるってさっき言ったな。ということは

「もしかして俺、魔法使えるんですか!？」

「魔法は修練さえこなせば基本的に誰でも使えますよ。もっとも才能も重要ですが」

おお！？そいつは嬉しい。

俺も男の子だ。魔法をバンバン撃つのは結構懂れている。

「才能といえば、泉殿には召喚術師の稀有な才能があるとお見受けします。召喚術そのものは複雑ではないので後にもエルルカ様にお聞きすると良いでしょう。きつと役に立つはずです。さて、他には質問はありますか？」

質問他にあるかな。なんで空から落ちてきたんだ、とか月が3つなこととかも気になるけれど……。

そういえばこの世界にアレはあるのだろうか、ふと俺は思い立った。

「そうだ、この世界には病気はありますか？」

「……風邪やら何やらのことか？無論あるぞ」

黙っていたエルルカが口を開く。

「いや、そつちじゃなくて、なんとというかえーと」

「さつきから煮え切らんやつだな。男ならなんでもシャキつと言わんかシャキつと」

「むむ、実は俺の世界でもよく解っていなかった病気なんだ。ほとんどの人がかかっていたんだけど誰一人助かってない」

「……ずいぶん剣呑な話だ。お前もかかっているのか」

「うん、俺もかかっているよ。でもまあ調子いいみたいだし大丈夫かな」

そういえば二人とは数時間以上一緒にいるけれど何も症状は出ていない。

「それは伝染性のものなのですか？治療術を行った方がよいのでは」「あー、それは大丈夫ですよ。病気がついてもウイルスとかそういうの原因じゃないからこれは伝染らない」

「ういるす？何だソイツは。しかし症状が出てはマズイではないか。どのような症状なのだソレは」

「この病気一人ひとり症状違うんだけど、確か俺は記憶感応症だったっけかな」

「記憶感応症・・・？どういった病気だ」

「うーんと、口で言うのメンドクサイんだけど人の記憶を自分のものにしちゃう病気かな」

「・・・そんな病気、聞いたことがありません。では我々の記憶も読み取れるのですか？」

「へ？どうだろう。自分の意思とか関係ないから入っちゃっうことはあるかも知れないです。あ、迷惑ですよ、すみません」

「いえ、構わないのですが・・・」

困った顔をするフィーレさん。人に記憶を見られるのはいい気がしないよな。全く厄介な病気だ。

「ふん、お前の記憶が読みにくいのはその変な病気とやらのせいかな」

「主よ！」

「ふへ？」

記憶を読む魔法、いやエルルカは人っぱいからこの場合魔術か。魔術はそんなことできるのか？

「お前が暢気に寝ている間に記憶を調べさせて貰ったぞ。幼いときの僅かな記憶以外は断片ばかりで意味不明だったが、その病気のせいか」

「ああ多分そうだよ。色んな人の記憶が頭に突然入ってくるせいで、物忘れが激しいからな俺」

「今は症状は出ていないのですか」

「うーん。たまたま落ち着いているだけかも知れないけど今のところ大丈夫ですよ」

「ふん、因果律に引きずられたせいで回復したのかも知れんな」

「そういえば因果律ってさっき言ってたね。ソレ何？エルルカ」

ふんぞり返って話しているエルルカに尋ねる。

「・・・オイ、そういえばどうして私にはタメ口なんだ、お前より十倍は年上だぞ」

「いーじゃん、別に。見た目子供なんだし」

「ぬおお・・・、ここまでの無礼狼藉、何十年ぶりだ・・・」

「・・・主よ、住んでいた世界が違うのです。致し方有りません。

しかし因果律は間違いなく変わっているのですか？」

「チツ、教育は後か。仕方ない・・・因果律の変更は間違いないぞ。界魔術行使の痕跡がしっかりと残っているからな」

「どゆこと？」

「つまり、お前は年もとらんし、メシもいらんし、糞も出ない、霞食って生きていけるってことさ」

「・・・え？」

「我々使い魔と同様になつたということです、泉殿」

「ええー!!」

なんてこつたい。ご飯も食べられないし、毎朝の快便タイムも楽し

めないだなんて！

永遠の少年とかピーター ンじゃあるまいし。

「別に良いではないか。案外楽なもんだぞ。食費もかからんしな」

「んん？エルルカもそうなの？」

「わ、私か。えー、いや、私のことはどうでもいいだろう！」

突然ギャーギャー怒り出す大天才様。そんなに怒っていると血管切れるぞ。いい歳なんだし。

「・・・主は、界魔術の実験に失敗して因果律が捻じ曲がったのですよ」

「戯け！勝手に言うな！」

「彼の過去を勝手に覗きみたんです。ご自分の過去が明かされることくらい当然でしょう」

「ぐぬぬ・・・、言うではないか赤筋肉・・・」

悔しそうにプルプルしているエルルカ。その振動につられて頭の帽子の鈴がリンリン鳴って可愛い。

しかし年を取らないって不老になるってことか。

異世界に召喚されて不老になって謎の能力ゲットって、よく考えたら結構運いいんじゃないか俺。

「成長期の泉殿には辛いことですが、どうか気を強く持つてください」

いかにもお劳しい、と言いたいような眼でフィーレさんは俺を見る。ん？成長期の俺に辛い？・・・それってもしかして、

「うははははは、私と一緒に、お前もずっとガキのままだ！良かった

なイズミ！ざまあ見ろ！」

エルルカはいつのまにか復活して馬鹿笑いしている。く、このガキ
人事だと思っ！

「う、嘘、じゃあ俺もつ身長・・・」

「はい、伸びません」

「筋肉は・・・」

「基本的に身体能力も一切変わりません」

この現実は今までで一番キツイ現実かも知れない。

どうせ前の世界にいたって居場所があつたわけでもないし、いつも
一人だつた。

それならこの世界で気楽にやればいいのか、なんて軽く考えていた
俺には重たい現実。

いつかトウノよりもでかくなって踏み潰してやるのが夢だつたのに
う、これは結構クるな・・・。

「さて、こんなものでしょうか。魔術に関してより詳しい話は私よ
りも主にお聞きくださつた方が良いでしょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

フィーレさんは優しく笑っている。真顔だと精悍で鋭い印象だけど、
笑うと少し子供っぽい。

そつえばお礼をちゃんとやっていないな。

二人は自分の国を捨てて俺を助けてくれているのに。
お礼、言わなきゃ。

「あの、二人共、本当にありがとうございます。今更だけど国を・

「

「ふん、そこまでにしておけ。礼を言われる筋合いはない。やりたかったからやってるだけだ。」

「でも……。あ、エルルカ、中々言えなくて悪かったけれど、あの時俺を助けてくれてありがとう」

「む？ああ、墜落していたお前を助けてやったことか。子供は気にするな。大人として当然だからな」

「……それでもだよ。ありがとう」

「ふん、受け取っておいてやる。私は心が広いからな。」

「いいか、お前は精々堂々と私の厚情を感謝して受け取ってればいいんだ。」

「どうせ私も無駄に年を取って暇していたところだ。年を取るとな、面倒事は中々に刺激的で面白いのさ」

「ニヤリ、と不敵に笑う金色の少女。隣で瞑目して微笑む赤色の偉丈夫。」

「どうして、この人達は自分の居場所を捨ててまで俺を助けてくれるんだろう。」

「ずっとさっきから胸に引っかかっている疑問。」

「だけれど俺はそれを結局口にすることはできなかった。」

「知らなくても幸せなら、知らないままでいい。俺はそれで充分だと思っ。」

「そうだ！おいフィーレ、酒を出せ。これからしばらくは一緒にいるんだ。家族が一人増える祝杯を上げてやろう。」

「家族・・・？」

「どうせお前は这个世界では天涯孤独なんだ。だから私たちがお前の仮初の家族になってやろうというんだ。ほら、だからさっさと私を崇めよ。私には敬語を使え！今すぐだ」

居丈高にそう言うエルルカの顔が余りに眩しくて俺は少しだけ眼を細めた。狭い視界は滲んでいる。

一度眼を瞑って、それからもう一度彼女たちを見よう。

这个世界での俺の大切な家族を、忘れないよう眼に焼き付けるために。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

登場人物（前書き）

ここまでで出てきた登場人物の設定集です。進行に合わせて更新していく予定です。

登場人物

泉

年齢16歳 性別男 身長160cm 体重49kg

魔力色 神酒

病名 記憶感応症

異世界から召喚されてしまった薄幸の美少年（笑）。生い立ちのせいか男らしい男に憧れ
女らしい女がタイプ。美少年のお約束としていろいろ謎がある。

エルルカ＝フィン

年齢263歳 性別女 身長140cm 体重30kg

魔力色 白炎

金髪赤目のスーパードア美少女魔女つ娘ロリババア。白き炎の魔術師は
自称ではなく他称。

タイプは華奢な美少年。フィン家は現存する最後の魔女の一族で、
エルルカはその最後の生き残り。

世界でも有数の魔術師ではあるが魔女の使う魔術は余り戦闘に向い
ておらず、主に薬などを作って生業を立てている。銭ゲバ。どちら
かと言えば魔術の研究者。

フィーレ

年齢不明 性別男 身長190cm 体重81kg

魔力色 太古の炎

赤くてマツチヨな褐色イケメン。ツンツンヘア。火の精霊にして
エルルカの使い魔。

名前の由来は英語のfireをそのまま読んだだけ。

非常に強力な精霊で、召喚術が専門ではないエルルカにとって手に余るくらい高位の存在。

その実お人好しで人間が大好き。

武器として剣を使うが完全に力任せで剣術も糞もない。しかしその怪力は剣術すら凌駕するもの。

一回闘うごとに剣を折ってしまっているのでエルルカ曰く金食い虫精霊でもあるらしい。

あだ名は筋肉ダルマとか。

リラ＝メイスト

年齢31歳 性別女 身長173cm 体重66kg

魔力色 剛毅

栗毛ロング長身正統派美女。ボンツキュッボンツのナイスバデー。

教会騎士団団長にして恋する30台。

エルルカの元弟子であるが、魔女の系統の魔術を一切使えず、代わりに肉体強化ばかりを極めた脳筋マジックナイト。

お嫁さん修行によりその嫁スキルは大陸でもベストテンに入るほど。しかし貫い手がなぜか見つからない。エルルカ曰く愛が重いせい。

基本的に毎回初恋。失った恋は無かったことにしている。

ヒューム

年齢43歳 性別男 身長185cm 体重73kg

魔力色 金剛

黒髪オールバックなナイスダンディ。教会騎士団副団長、元奴隷で秘密の多いおっさん。

槍術の達人で頭も切れる。しかも性格は高潔な武人そのもの。ロマンチスト。

しっかりしてそうでかなり抜けてるリラとは相性がいい。

朴念仁臭く見えて実は恋愛上手。その槍は狙った獲物を必ず貫く。

トウノ

年齢不詳 性別男 身長大きい 体重ひよろい

病名 知らない

のっぺりした顔でひよろい。

気がつけば泉が同居していた男。親代わりだが金を稼いでくる以外は特に必要としたことはない。

苗字がしょっちゅう変わるので結婚詐欺で稼いでいた疑惑あり。

余り素行の良くない友人ばかりだったので少なくとも善人ではない。どちらかと言えば泉にとってのラスボス。小遣い的な意味で。

用語集（前書き）

用語の説明です。こちらも進行に合わせて更新していく予定。

用語集

世界関係の用語

銀世界・・・第一世界とも。銀大陸とも呼ばれる（この世界の人々の認識では大陸が1つしかなくてそこに全ての人間がいるとされているため）。人間、精霊、魔物が共存する世界。五大国（白、黒、赤、黄、青）と無数の小国からなっている。

金世界・・・第二世界とも。神、精霊、魔物の世界。通常召喚獣はここから召喚される。

第三世界・・・銀、金世界以外の雑多な世界の総称。ここから召喚されることは滅多にないが、下手な召喚術を用いたりするとここから中途半端な魔物が召喚されたりする。泉の世界は恐らくここに含まれている。

白の国・・・五大国の1つ。大陸中心部にある。二会制と呼ばれる教会、議会の2つからなる制度を取っている。教会は女王を首魁に教会騎士団、王宮魔術師への指示権を持ち、議会の構成メンバーは貴族または大商人で、軍への指示権を持っている。女王は代々白の君と呼ばれ、民間信仰の対象ともなっている。

教会騎士団・・・法の体現者と呼ばれる教会騎士の組織。団長は団員から功績、信仰が篤い者（女王の覚えがめでたい者ともいう）から選ばれ、副団長は議会推薦で選出される。これは事実上騎士団が女王直属の秘密警察に近く、権力が非常に高いことへの対応策である。

王宮魔術師・・・女王に近侍する魔術師。人数は決まっていなくても彼も優秀な魔術師である。政治的権力は一切持たないことになっているが、女王に取り入っている者もいると言われその実態は不明。

紫の国・・・大陸北、大草原に面した、元奴隷身分の総領ウエスタが治める国家。冒険者の国とも呼ばれるほど、国内には遺跡やら何やらが溢れている。冒険者のおかげで経済は発展しているが治安はとても悪い。

ギルド・・・各地にある冒険者の組織。元々は国籍を持たない人々を保護する団体だった。国によりギルドの権力は違うが、冒険者が多く、奴隷出身者が元首である紫の国は一番ギルドの地位が高いと言える。

義勇軍・・・ウエスタを大将とした紫の国の軍の呼称。元傭兵がほとんどを占めており非常に強力で国内の治安に一役買っている。しかし、荒くれ者ばかりなので彼らのせいで治安が悪いとも言えるかも知れない。

魔法関係の用語

魔法・・・霊血を供物に界血に働きかける神秘術の総称。人間が用いているのは魔術、精霊は精霊法、神は奇跡など様々なものがある。

界血・・・大地に満ちている魔力。かつての神々の痕跡とも呼ばれているがその元は不明。魔法として行使された後はまた大地に還元されるため事実上無限。

霊血・・・生物に宿る魔力。生命力とも言える。生物により違いは

あるが基本的に最も多く持っているのは精霊。泉曰くMPみたいなもの。

魔力色・・・それぞれの霊血の特徴のこと。いわゆる属性。人により千差万別である。

魔物・・・魔法処置により生態系を築いている生物の総称。繁殖はしないが、界血を吸収することで死んでもいつか復活する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770ba/>

君の物語

2012年1月8日00時50分発行